

展 望

社団法人埼玉県放射線技師会
副会長 堀江好一



明けましておめでとうございます。皆さまにおかれましては、健やかに新年を迎えられましたこととお慶び申し上げます。また、日ごろより当会に対する暖かいご理解とご協力を賜り、厚くお礼申し上げます。

さて、新年といえば、人は誰しも何かしら明るい希望を持ちたくなるものだ。今年一年が良い年になるように、身の回りに悪いことが起こらないように神頼みもしたくなる。そんな時だからこそ巻頭言に暗い話題はふさわしくないと思い、何か良いことはないかと今年を展望してみたい。

ところで、昨年重大ニュース。私にとっての一番は、マイケル・ジャクソンさんがロンドン公演を目前にして死去されたことだった。またその後、公演のリハーサル風景や舞台裏を映画化した「THIS IS IT」は、涙なくしては見られない感動作品であり、私にとって、生まれて初めて劇場で2回見た映画となった。

私事はさておき、昨年起きた明るい出来事のひとつとして、日本放射線技師会の北村会長が中央社会保険医療協議会（中医協）の専門委員に任命されたことを挙げたい。ご存じの方が多いと思うが、この協議会は診療報酬の具体的な点数付けを行う機関のため、委員の影響力が非常に大きいと言われている。保険の支払側委員、診療側委員、公益を代表する委員を合わせた20名の「委員」と、専門の事項を審議するための「専門委員」で構成されている。昨年10月に委員の改選が行われ、北村日放技会長は放射線技師の代表としてではなく、昨年9月に発足した「チーム医療推進協

議会^{*1}代表」即ち、コメディカルの代表として選任されたい。

これは本当に喜ばしいことで、このような会議において発言できることはコメディカルにとって大きな一歩だと思う。

それに対して、委員の推薦3枠を失った日本医師会では執行部への責任追及の声が上がったほどであることから、中医協委員の影響力が伺い知れる。

政権交代の影響は医療界にも確実に波及してきている。民主党連立政権が良いか悪いかという問題は別としても、従来の、官僚、政治家、特定の団体の力に支配されてきた医療行政が少し変わり始めたのではないだろうか。利益を力で奪い取るのではなく、より国民の役に立つ人や団体が大切にされる。そういう世の中になって欲しいものだ。大不況の中、医療費の政府負担額が大幅に増額されるとは思えないが、開業医優遇と言わざるを得ない現在の医療費の配分を、少しでも国民目線では正していただけるよう中医協の委員の方々を期待し、今年の診療報酬改定に注目したい。

そして我々は、チーム医療の中で他職種から、何より患者さんから必要とされるためには何をすれば良いのか、何が足りないのか、我々自身の事業仕分けをあらためて考えよう。

※1 チーム医療推進協議会

平成21年9月に日放技北村会長を代表として発足した、医療職種13団体と患者会で結成した協議会。

この協議会の立ち上げには、埼放技が日放技に紹介した医療ジャーナリストが深く関与しているはず。